賢女
金伽

一代物語

三

へ13
3037
3

門へ13
號3037
巻3

千代物語巻の三

国 編 録

○千代女危難を遁る事

付り 恩顔の老臣忠記のる

○千代女播州室の津へ赴く

付り 遊女尾上ゞ事

山陽奇談 千代物語 巻之三

東都 鼻山人 著

五

千代女雑を遁れて没落のる
附り恩顔の老臣忠死のる

茅寒して松柏の綢ふ移るを知る者ふ
右三門の絶ふ釜川落ちを寃の罪ふ沉り累年の
怨みを散ぜんといへども娘ふ代が移忠知れざれば
能を報して怨の孫を奴ざるがごとく

居さうろう話後ふ代八瀧西を召捕ふ日白ッて
行形の為ふ今宮の八幡宮へ行でゝ災ちの程ふ
係る禍ひあるべゝとふ事ふ成ふ下向ふ願きろる
道ふて家の子供尾ふ義大夏を結ゝ紐来ろう
一大るの出来てひ切ふ代八
繋ぎコハ切ニるゆゝとふ素物より立出れがふ義の中
ろふ世ふ成ちの程ふ西形ふりの世下知ふて解義の
人を向ふ是ふ父上を宰嚏ふ素世出ひ張ふて世程

体ふひゝ初程ふ方を召連まいひふ世毋上ふ八
張ふ災さ世ふひゝうべ桂鬼賀右エ門どのるむるく
付きうて社ひく世家の上下ゝ捕八逢ひふ某ゝも
那の手絡を召ヤ又世毋ふ人の盤ゝ一ト方ろうと召船
たくひゝゝげまづ姫君のるゆの学来ふさふ世知せまう
さん為早撃ふの死命ふあらくて世代絡ふて仇国ふ
とも落ふ世ふうずべ禍ひ為ち世召のふくトふうん
ふんといべふ代八解うのるゆふ悔乗ふて涙さ人も

出ずらず忙然として居ようるが為に人目を
憚の下婢女あを近付ケ抱んと為るを通りの為
変事をあり〳〵下向も叶ふまじ是より何方も落
行ぶ〳〵抱んと為あも抱じ家の人なれば一旦の難
遁れかたからん道の程の用ふ代金物を拵め持
せ遣る測なども皆配あり〳〵て所々落行
ぶ〳〵とありふれば皆〳〵亀角のいらくもせざりしがその
中あて一人ふりかくるの係る出来る計見

捨て我先にいろふ箱の内ありとて何国へ落
行ひろん呂亀も角も出一緒ふ去ると云で不代
金稼て辞とよ持ふとも事ふせん方仮もあ〳〵
ふや〳〵逃行ぶ〳〵とて是の為ふ今ふ稼まるも
知是ありと皆〳〵悔中て逃行ぶべき為いふ仮て
供の親ふふ扶せ下る小物金銀まで悉ふ配分
して為せられあり難く仕兼して皆敬〳〵ふ逃
去ぬふ代いま義ふ向ひ下婢のさがの死者

あり吾妻人程を知るあべ後日の禍人とも
なりねべし今人安し扨自命を捨ひ
妻ひ仇方へありとも落ちべしといべコハいふ仰
とも覚えず我身西門あて遊ばまど死食をあづ
らえ通来るしも姫君の西為いふと思ふたろう
あり仇国まで西僧して西先途を尋ねまひら
せん存念あるきトいべ侍も無ふ是死のうる
ばく扨ひ思ひ元に禍人のちばれ戸ノ

爵在工門吾倹ホ人を
ざりを浦〻然ホ扨ひ父人義〻
結ふ母うをひふ〻〻ひより記是ト覚へう
ぢじ吉あづら吾倹人女子の身あり扨身とも
外ホ勧けくなくこれ様鬼を一ト方然ふるも
叶ふまど仇国へありとも身を浦〻父うのう
外の扨をもゆべし吾実の父伊与平ぢも大
方人中国のうちホ扨ひさんなれば一ト先それのうう

仕く手まくべく扨て多の乗えいうふぞやとあつそれが
娘の扨さん方までとお結ひ仕いやべくれとつぶふ
残りたる潤分をあどこれまつるべふ代へ法く
五郎ようまつし文殊菩薩の尊像ぞうを
乳母ふ法く安義ふ通へぞ落形ろが道の程も
りしや付ものそらんうと乗きふ法の風の拍
の業ふ戦ぎ堺の尊の月ふうとぶくまでんを見
祈清く昔のわどれ多のあ戦結和の答ぼひ

して間道を辺り夜八又拍子の尾荒ふ和の役
城かくして明ケふまぐべく死結を結里人の胡飯
の煙りを見ぎる門ふ一簞の食を乞
まつふ付それ結来孫答ふ怪しやられ男
人目も色しぞとく代へ思案を宛丈ろる結ひ
の玉磬を磬ようふっと切り猛巾ふ答の小笠
をうぶう大布の上ふ乗して去義ゲ刀提ぶとさ
いうあも西国方の者の児小性なるふ来降へ出る

すがた　ゆせ　まんぞく　ふろしきづつみ
ゆふ姿を窮がゝ義八風呂敷包を肩ゝ負け
くろぎ　めんじゅ　きょう　ぐんしゅう　そぐ
黒木の念珠法衣ぐりゝ京まゐりする国舎育ちい
ぐんぐち　ぐしく　えど　ひろうさ　ぶ　ぐんしゅう
よ江道ぼ道ゆ行くるさゝ武ゝて連立ち行くゝ義州
ひろうまのくく　ひろずくく　ぶんこく
八叶ゝ百里右馬頭大江の廣住ゝの分国ゝ
けんもん　ぶんぐ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
大門家の隷門ゝ分れゝ義ゝ武ゝ遊ゝ指ゝ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ゝ拶ゝ行ゝ武ゝ後ゝ後ゝ義ゝの弓ゝ八敵国ゝ分れゝ尚ゝ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
安きゝ人ゝ多ゝく義ゝ角ゝし〜て日報十七又日ゝ後ゝ中ゝの
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
吉後ゝの中ゝ山ゝぞ義ゝ行ゝ来ゝ行ゝ来ゝ行ゝ来ゝ行ゝ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

ぞくよう　ぞくよう
続用の駄ゝもあゝしゝが出ゝ足ゝまゝでゝ漸〜〜ゝ清ゝぎ
まぐこれ　ようす　たぐそ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
来ゝゝ行ゝ武ゝ今ゝ八一級の駄ゝ馬ゝをゝ引ゝぎゝ方ゝ後ゝ馬ゝを引ゝき
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
そのゝ人ゝ義ゝ八老の孫ゝ後ゝの労ゝ足ゝ寒ゝ来ゝ人
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
悩ゝ武ゝ一足ゝも歩ゝ行ゝ〜〜ゝ行ゝ清ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
拳ゝ行ゝて持ゝる調ゝ行ゝを出ゝ〜〜ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
嗣ゝも調ゝ行ゝと武ゝ八頃ゝ十月の中旬ゝ行ゝ山
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
中の凍ゝ行ゝ〜〜偶ゝ〜〜ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ゝ義ゝ八足ゝ惜ゝ〜〜ゝ行ゝ代ゝ猿ゝを抱ゝ行ゝ代ゝ義ゝ行ゝ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

深尾
真藏
吉備の
中山ゆ
飢寒の
苦辛を
受く

ひら
ひを按摩りてこハ何と
声さへも出さうずるやその日も黄昏手くらの
いとで笑さも泥坊こ風もさまく拵を呼ゝ茶
出ふ埋て行一村立る雲ふさ重霧立つて降る
雨ふるも薄へ星も疫ましいふとも
ふ代ハ粥ゝまを抱き抱えく少ゝ成まる拵が
拵ふ伏せあさうの落葉ふ枯枝搔集り火成
焚付て呉一包持ゝる呉彩の小袖ふ呉て僅ふ

ひの
俄け〳〵粒を出〳〵我口をとうる〳〵泣〳〵
口説くるいふまを義よ足まで抱ん身を絡うと女の
身の毛ぐゝと山川を絡くん絡くも身まで分来
泣まいるれば云ひ娶ちくも疫まるぞやそ
道の程も人妻〳〵あるふ期まで只何の条箱也
拵〳〵ふ分いふ婚〳〵の飢をもたもるふ如
あるれよりトいへばまを義ハ涙を上げ涙を流〳〵作
多の家の子命をるの中も主従の仕縁法ら

稼ぐ者は是まで世話をする中法度我身に惜くも
齢ひ傾くまで家力竭く姉君の世話ふ如何ら
せんるの深き恩いまそれ今は家を乱ふ動機
道ふ悩まで迎も活延ん命とも思へず今
うらんとまでまで二つあるうら矣ふ中るる仕れば稼ぐ
つくふ姉君は一ト筆の表を拵へ身ふ手ふ我身
一期の糧を合せて飢寒を免れ一時もあく拵ふ
開まで出すべし給ふ紀老が身の介抱ふ切の拵へ

身までおやまちまふ拵へ切のひも書ぬ
るうふ兵衛も角も一結ふ結ぶ死のをト涙ア
紋を縫ふ者は手ひてやくふふきとまのび
ぎんで大線を乱ると云て姉君も呂の人ふ
大事の故を拵へふ身ふて紀老が身の二ッ三ッ
樂ひふんや拵へ吾身ふ引とふ拵へ身を動
ふんは身乱ふふとも云て吾身ふ助ふまでとや
疾ふと義ふ死身を記事ふ第引解き居のを

仮くゝ女代が肩ふ熱の
兵須ふ咱べだくうちあり
婆な死ぬ仏ふくゝ面の
付んとあらべ曲くけあを
市俵くゝ我れ死をべき
まゝくあれ伏まふ抱きく
苦ふ苦をとべ寄ねべき
あの中ふのくう伏べふ

女代は抱きく
抱抱きく行も立
脇を閉て嘆くもく
却しきふ表をも伏
仇温あて時ちさ
まゝ死ぬもあらざれ
だくうふ口説ゝ須の
移べ式者のふゞゝを
あらんと泣ゝ焚火せ

抱抱きく行も立者抱就せべ今ふを吉ふく
くくくくれべ女代はあくの
立ぢ落る涙を抱ゆめ吾身の
ふゝ抱きれどもるり切し果て
死ぬ死ぬ抱ふ兵配髪ふ分くく伏泣
泣くもど服べき遠ふ
抱抱者の抱ゝを立れ
辺りの落ふ抱除紹抱を

抜て漸〻と死髪を入るだうふ去抜上ケ死髪を
埋る土義が居るのを〻く我身ふ落ひ大小世界を
くろぎ
是不の殊教押のしで合掌する南無生天仏果
菩提世〻佐とも拝じ道をふ追ひ名の父〻
ある者や今〻ハ已き人とそも大悲の力を添くたび
ゆく〻涙とともふ回向して彼れの冥〻あうう〻
六
お代女捜別室の津ふ到る
ゆり拉女尾上ゲる

影〻お代ハ独り身の心細〻と漸〻と捜廻く
出ぶ〻や古郷をも捨く放浪道の程も心安〻れば
まづ室の津ふ帰りて暫ふて伊予平ゲ清長其外の
縁ふ沿の月四国へ渡りたれば明ル夾なるぶ〻ハ
海ふ来るまど死出の旅ハ出ぶ〻れば吉ハ氏和ふ豆をいめて
海ふ頃を待ろんとて湊の宿ある乗合ハ
宿をとりて和泉もの紀光陰を送りる事やり嬉
竜の縁風を待べき時てもあるれば一ツ二ツある長新

又八茅ヶ崎に行くべきなど賣代を兎角して其の日
其の日を暮すに宿の主人を始め女子の身とは見へ
ねども〻ざうりを履ふ一ッの知山なるゆゑ出来ぬ
其内〻に代が宮の添ひむしろより其女の名ある和尚
代を彼方の門に尾上といへる若き繁容なるに
葉〻きぶ川竹の妻を給る身共最と思ひくらべ業も
優に成さて死が代が代が家に来りしを見て
苦閑なるゝね程の人に沉きあるれよるべき涙のうへ死

俤の風もあまりとしと程りの縄なるに代は俤なる
とも人付ず胡なる夕なの菅〻なれ男〻紅を流し
法〻毋吉義が一連純生と涙あるらに向るさて
或門のるゆるしが重いと面白〻俤〻年の門に義
見る人死まるに代は西向の座敷の俤子細りと
明ケて火揚うき拍き屋の幸色を見居る尾上
は向ひの二階の欄干に身を寄てゆの程り良あるに
程の〻ぞる代と面を見合せ尾上は俤といひ寄方も

あるべしとさ〜延べく松が枝ふるたる雪うち
掛ひていつようくよの雪さまあるれ掛りひあり
多あるもあらばいふ面白うらんと独り語〜なるふる式
朝あるはいとさくるる

白雪は浦見るあるひふ知らぬ者り

名ふ高砂の松のちぎり〜
と詠まれば尾上八姫面白の世家の河や代ゐど
より能ふあがらえまつ〜せ業いと若き姫君の族

播州室の津の遊君尾上

の宿りの独り住さぶらやん
憂く物ふとらん我身八川
竹の住べ実あぬさ夏〜と
身あれ八姫身ふ近きいとも
推傷げまいくとるるひ
ず今の世家の面白さる業
ふらずべ恋ん〜意思て徒ふ
をも勇さわまらせんと思

甚方に至愚なる人ハ何ぞ尊しかるべきト接授に
尤もらバ持られ人来らんと二階を下りて書方の座敷より
来らの四方八方の物語りに悟し時を移しける千代
も我身の望くあるなど鬮出して済ぬ中と鋭く
あれバ尾上もうるさしく我身ひとりが定めぬ上安の
万の客のいひなとを定めバ定めて浮草の指
まえるトおもひなんも恥かしけれど愚のまめ家に
来るまゝ程より御国の此方とまおらねひのつく

果に二なき定めなるおもひに沈みしがたゞ一ト云ふに
縒し糸の解初て結ぶ縁を離れてしなれバ綱に
望くあるおんみとらみなりし人を殺すなれば千年ならぬ
四方の引手に従ひある風も時に吹ならばあれバ夜な
しくは実の名を明されて又は一ト夜の仮枕に是迄の
諸人に云訳せし誠なき身の罪科をも浮めて欲
わさらでは恩の程は返すまじト恥を忍びて後に従
ひなぞ千代のみの中に独り物しく下ら節心なる

るとへはのくども明〻夾まで出者を社仕分と変化
ぐ〜と神のひ付体ふ行事も有ぬ浮雲の筋さえ
芋乗る死出の山ふ嬉〜くも彩宮ふのうる武蔵の
夢ねる人のいび明〻夾るぐでへ上り垂仕りもあり
きれまぐ出ふ仮寝〜とその仕り笠紙ふまぐでふ
彩日を見てはあり我もいつより下巻のうりの出の
あ死ゆ〜もおらぬどまぐ業者きふ仕り待きえ
いりぐ物と楽ぐおるまぐ今の出ぐ〜の程うみ

あり実ふ神の振合も他生の縁と出り仕り偏て
ゆべき出るあぐら出ふ父母ふ別見くいまぐ日彩も
立ぐれべいうふ吾人の仕ふ出の義れをび巻ぐ死
と見も角も忘の明くあ出ぐ〜の程をび熱ひ
まいらせんといべ尾上へ水ぐ赤びつく見な
尚体仕る業忘の神のひい浦くあり下々於されば
ふ代ぐ出屋ふ逗留中よりべのとり待ひ仕ふ
あくふ負出あれゆ〜ふ人を生く小神あひ

身の潔なるを人目を忍びて奢らふ行ふ只管
りの忌の明け頃を待ちて結ぶ所ろ久

千代物語

千代物語　巻之三終　巻之三十終

千代三十五